

【原著】

セルフアクセス学習センターの利用状況と 利用を促進するための取り組みについて

ラットソングリフィス 佑加理, 渡瀬 弥恵子

The Usage of a Self-Access Learning Center and Improvements to
Enhance Accessibility

Yukari Rutson-Griffiths and Yaeko Watase

概 要

自律学習分野におけるセルフアクセス学習の重要な役割は、異なる学習者要因に対応するための学習の個別化とオートノミーの育成である (Sheerin, 1997)。しかし、学習センターの設置によりセルフアクセス学習を提供したからといって、利用者がいなければ、あるいは学習環境を提供するための体制が整っていなければ本来の役割を果たすことはできない。本稿では、広島文教女子大学の英語学習専用のセンターを利用状況と利用促進の観点から調査し、センターが抱える問題について考察する。研究方法として、まず、既存の利用データからレギュラーユーザー層と非レギュラーユーザー層を割り出し、センターの学生スタッフと共に利用度の理由や原因を模索した。そこで生まれた議論を元にアンケートを作成し、在学生を対象に調査を行なった。アンケート結果からは、調査に協力してくれた学生のうちの4分の3が非レギュラーユーザー層であること、また、そのうちの多くが自身の英語に対する自信のなさや1人で利用しにくいことを理由にセンターを利用していないということが分かった。また、センターで行なっているイベントやキャンペーンの参加度や、不参加の理由についても調査をした。本稿の後半部分では、その調査結果をもとに、さらなる利用促進のアイデアや改善案、今後の課題について述べる。

Abstract

The main roles of self-access in the field of independent learning are individualized learning that can account for various learner factors and developing learner autonomy (Sheerin, 1997). However, mere provision of self-access learning through setting up a self-access learning center does not guarantee that its intended roles will be realized if there are few users and/or sufficient support for providing a suitable learning environment is not present. Having examined the self-access learning center (SALC) for English studies at Hiroshima Bunkyo Women's University with a focus on the usage of the center and usage promotion, the current paper will examine the problems that the center has. Existing usage data was first examined to see which students use the center regularly and which students do not and, together with student staff, reasons for the usage patterns were discussed. A questionnaire was created based on the discussions and

conducted among students at the university. The results of the questionnaire revealed that three fourths of the participants were non-regular users and that many students do not use the center because they are not confident in their English and/or they are hesitant to use the SALC alone. Students' participation in events and campaigns held in the SALC and reasons for non-participation were also examined. The latter part of this paper discusses ideas for promoting SALC usage and improvements as well as future actions.

1. は じ め に

英語教育における自律学習の重要性は様々な場で論じられ、学習者の自律性を涵養する場としての学習センターもまた、多くの文献や学会等でその意義やあり方について議論されている。広島文教女子大学の英語学習専用施設である文教英語コミュニケーションセンター（Bunkyo English Communication Center, 以下、BECC）内に設置されたSelf-Access Learning Center（以下、SALC）は、英語専用の自律学修支援室として学内の英語教育・学習に貢献している。SALCでは、毎日多くの学生が英語学習に励んでいる一方で、1年生を対象にしたSALCオリエンテーション以来、SALCを自主的に利用しない学生や全く利用しない学生がいることも確かである。また、SALCでは毎年季節ごとに様々なイベントやキャンペーンを開催し、英語教員やSALCスタッフに親しみを持ってもらうと同時に多くの学生の利用を促進しようと試みているが、参加学生の学年や学科に偏りがあったり、参加者の多くが普段から利用している学生であったりと、課題も多い。そのため、2018年度前期にSALC内で4人の学生スタッフを交えたプロジェクトチームを発足させ、学生とともにSALCの利用状況や問題点について幾度も議論を重ねた。また、7月の学生スタッフワークショップでは、全ての学生スタッフと情報を共有し、問題の原因や可能な解決策を模索した。本稿では、その内容を元に作成した在学生に対するアンケート調査の結果と、そこから見えるSALCが抱える問題をもとに、今後の課題や改善案等について述べる。

2. セルフアクセス学習センターとその役割

Benson & Voller (1997) は、1970年代を境に、文献や学会、ニュースレターなど様々な場で言語学習における自律性についての関心が高まりを見せはじめたと述べている。竹内 (2010) もまた、それまで外国語教育研究の中心が教授法であったのに対し、1970年代からそのあり方が見直されるようになり、「教えること」から「学ぶこと」へと焦点がシフトされたとしている。Benson & Voller (1997) の言う、学習者の自律性を表す言葉であるオートノミー (Autonomy) の重要性が議論されはじめた1970年代からすでに半世紀近くが経とうとしている今、外国語教育における学習者を中心としたあり方を疑問視する教育従事者や研究者はほとんどいないと言っても過言ではなく、オートノミーや本稿で取り上げるセルフアクセス学習 (self-access learning) 以外にも、student-centered learning や, independent learning, self-regulated learning, self-directed learning などの言葉が学会や文献で多用されることから「学び」への関心がより一層深まっていることが伺える。また日本においても、2005年に日本自律学習学会 (The Japan Association for Self-Access Learning, JASAL) が設立され、自律学習分野の研究者やセルフアクセス学習センターに従事するスタッフが個々の研究結果や教育現場についての情報や議論を交わす場を提供している。学会のホームページによると、現在ではその会員数が350名

を超え、このことから日本の教育現場において自律性を涵養することへの関心が伺える。

Gardner & Miller (1999) は、オートノミーの定義についてはその分野の研究者間でも様々にあるとしながらも、その概念自体は1960年代の「生涯学習スキル (life-long learning skills) [引用者訳]」と「自己の考えを持った個人 (independent thinkers) [引用者訳]」の養成に関する議論が基盤となっていると述べている (p. 6)。外国語学習におけるオートノミーの研究者として著名な Benson は、2001年に出版した著書の中で、オートノミーを、学習管理、認知プロセス、学習内容の3つの分野において「自身の学習を管理する能力 (capacity to take control of one's own learning) [引用者訳]」と定義している (Benson, 2001, p. 58, p. 61)。一方、オートノミーと同義語として用いられることの多いセルフアクセス学習は「セルフアクセス学習センターなどの学習環境によって支援された学習形態」のことである (関屋・マイナード・クッカー, 2010, p. 193)。

オートノミーとセルフアクセスは異なるものを指すが、その両者が同じコンテキストで多用される理由は、その2つが密接に関係しているからである。セルフアクセス学習や、セルフアクセス学習センターは、オートノミーを促進する手段として最も利用されている方法であるうえに (Benson & Voller, 1997), それらを用いたからといってオートノミーの養成が保障されるものではないにしても、その有用性は広く認められている (Benson, 2001; Benson & Voller, 1997; Sheerin, 1997)。

Sheerin (1997) は、セルフアクセスを推奨する理由は2つあると述べている。1つ目は、学習の個別化 (individualization) であり、苦手分野や、学習スタイル、学習の好み、学習内容などの様々な学習者要因を考慮した学習支援ができることである。2つ目は、自律学習 (independent learning) の促進であり、学習方法を学ぶことや、自身の学習に責任を持つこと、より効果的な学習方略を学ぶことにあると言う。Sheerin は、この2つのうちの前者は実用的な理由、後者は理想的な理由であるとし、セルフアクセス学習を提供したからといって自動的にオートノミーを養成することには繋がらないとしながらも、セルフアクセス学習センターが、従来の教員主導の教育とは一線を画し、自身で学習目標や学習プログラムを確立することが、ひいてはより良い学習者になるための学びを促進することから、セルフアクセス学習センターがもたらすオートノミーへの貢献について言及している。

Gardner & Miller (1999) は、セルフアクセス学習が「教えること」ではなく「学ぶこと」に焦点を当てた概念であるとし、学習者の「教員への依存」から、オートノミーへと導く方法であると述べている。また、セルフアクセス学習の正当性を示すものとして、最大限に様々な学習の機会を提供することと、オートノミーの養成を挙げている。

Littlewood (1997) はオートノミーを、「学習者としてのオートノミー (autonomy as a learner) [引用者訳]」、「人としてのオートノミー (autonomy as a person) [引用者訳]」、「コミュニケーターとしてのオートノミー (autonomy as a communicator) [引用者訳]」の3種類に分け、それぞれのオートノミーの育成方法を示している (p. 83)。例えば、自律学習や、学習方略を用いるとき、学習者としてのオートノミーが育成されるとし、言語学習におけるセルフアクセスの最も重要な役割は、これら自律学習や学習方略を実践する場を提供していることにあると述べている。続いて3種類のオートノミーはそれぞれ相互関係にあるとし、自律学習は個人の学習コンテキストを創造することにも寄与することから、人としてのオートノミーを育成すること、また、セルフアクセスによって得た学習方略は、より多岐にわたるコミュニケーション方略を獲得することにも繋がることから、セルフアクセスがコミュニケーターとしてのオートノミーを育成することにも貢献すると述べている。

このように、セルフアクセス学習センターは、その性質上様々な学習方法や学習機会を提供し、多種多様な学習者要因にも対応できる場であるということと同時に、オートノミーを養成するという観点から、外国語教育分野において現在の地位を確立した。しかしながら、セルフアクセス学習センターを設立したからといって、オートノミーが育成されるとは限らないということは、前述した通りである。関屋・マイナード・クッカー（2010）は、セルフアクセス学習センターにおけるオートノミーの育成について、以下のように述べている。

SALCでオートノミー育成を促進するためには、次のようなさまざまな要素によって学習を支援する必要がある。具体的には、学習理念、学習者ディベロップメント、アドバイジング・サービス、語学カリキュラムとの関係、目標言語を実際に使ってコミュニケーションを行う機会、SALC運営への学生の積極的な関与などの要素である。（関屋・マイナード・クッカー、2010、p.198）¹

また、Sheerin（1997）は、自律学習が成立するかどうかはその施設を利用する教員と学習者の利用方法次第であると述べている。Sturtridge（1997）は、自律学習への貢献度は測れないとしながらも、セルフアクセス学習センターの成功・不成功を隔てる1つの要因として、学習者の利用数と利用度を挙げている。不幸にも失敗に終わってしまったセルフアクセス学習センターの特徴として、センターが閑散としていること、または多くの学習者がいたとしても本来の設立目的である語学学習をするためではなく、他の教科の学習をするための都合の良い場になってしまっていることをあげている。また、成功している学習センターは、ニーズに応え、発展していくための柔軟性が備わっているとし、一方で失敗に終わってしまったセンターは、それらの要素が欠けていたことに加え、革新の管理、適切な場所や設備の提供、スタッフ研修、学習者指導、学習者の文化的強みを生かすこと、適切な教材の提供のいずれが欠落していたと述べている（Sturtridge, 1997）。

Gardner & Miller（1999）は、成功に必要な要素として、教員、教育機関、学習仲間、社会を挙げ、セルフアクセスは全ての人に恩恵を与えたとしながらも、多くの人にとってその概念は新しいものであり、セルフアクセスに対する姿勢は、そのものに対する知識によって変わると述べている。Benson（2001）もまた、教員中心であった学びからの移行になるため、学習者指導（learner training）が必要であると述べている。つまり、学習センターなどを設けてセルフアクセスを提供する準備ができていたとしても、それを利用する学習者がいなければ、また、自律学習を多面的にサポートする体制が整っていなければ、学習センター設置の本来の目的である学習の個別化やその先にあるオートノミーの育成が成立しないということである。本稿では、まずその第一歩となる学習センターの利用状況と利用促進に焦点を当て、広島文教女子大学のセルフアクセス学習センターであるSALCを分析すること、さらには今後の課題について考察することを目的とする。

1 関屋・マイナード・クッカー（2010）では、学習センターの総称を表すものとして、「セルフアクセス学習センター」もしくは、その英語にあたるSelf-Access Learning Centerの略称である「SALC」が用いられている。尚、広島文教女子大学に設置された学習センターの名称もSelf-Access Learning Center（略称SALC）である。混同をさけるため、本稿において、この箇所以外で用いる「SALC」という用語は、広島文教女子大学に設置された学習センターを指し、それ以外の学習センターや総称としての学習センターを指す場合は「セルフアクセス学習センター」を用いることをここに記す。

3. 広島文教女子大学のセルフアクセス学習センター

BECC では、英語を学習し、使用し、社会的な状況下において実践することによって真に英語の運用能力を得ることができると考え、以下をミッションとして掲げている。

1. We are here to provide relevant, challenging and engaging courses teaching real world language skills. (私たちは、実社会で役立つ、意欲を掻き立てる魅力ある英語教育を行います。)
2. We are here to make sure that society is served well by the language skills and cultural knowledge of the graduates that we produce. (私たちは、卒業生が本学で培った語学力と文化知識を活かし、社会に貢献することを確認するものにします。)
3. We are here to help students develop as independent adults, who can contribute positively and responsibly to society. (私たちは、学生が意欲的に、且つ責任を持って社会に貢献する、自立した社会人として成長する手助けをします。)

その上で、SALC の役割は、学習者の異なる習熟度やニーズに対応するために学習の個別化を可能にすること、また、学習者の自律性を涵養することを通して BECC での英語教育に貢献することである。そのため SALC では、授業での学習をさらに自分の体験として拡大していくことができるように、心地よく、安心して英語学習に励むことができ、いつでも支援が受けられる環境を提供している。以下、SALC の学習環境や教材、サポート体制、SALCで行っているイベントやキャンペーンについて述べる。

環境面で特徴的なのは、後述するラーニングアドバイザーのオフィスを除く全フロアにおいて、使用言語が英語のみであるということである。一歩 SALC に足を踏み入れれば、教職員と話すときはもちろん、学生同士で話すときも英語を使用することになる。SALC 内はフロアを大きく分けるふたつのエリアイメージを設定しており、ひとつは活気のあるコミュニケーションのエリアと、もうひとつは動線の少ない静かなスタディエリアである。コミュニケーションエリアを特徴づけるものとして SALC ラウンジがある。SALC ラウンジでは、ラウンジタイム担当の英語教員が学生を迎え、リラックスした雰囲気の中で気軽な会話から課題の添削まで英語でのコミュニケーションを楽しむことができ、英語を「学ぶもの」から「使うもの」として、英語の運用能力を自然に高めていくことができる。また、スタディエリアでは必要な教材にすぐ手が届くところに設置されたテーブルで思い思いの学習に集中して取り組むことができる。

SALC には、書籍や雑誌、映画の DVD、音楽用 CD など、様々な英語学習に関する教材があり、利用者は自身の学習目標や習熟度に合ったものを選んで使用することができる。また、SALC では、本学の学生の興味関心や英語のレベルを考慮し、独自に学習教材を作成している。これらは、映画や洋楽などの生教材をどのように英語学習に用いるかといった学習のための手引きであったり、授業で習った内容を補強するための教材であったりする。そのうちの一つである、SALC Activity は BECC における英語の授業課題の一つとして必須とされており、Reading, Listening, Writing, Speaking の 4 つのスキルに分かれている。内容はスキルごとに CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) (Council of Europe, 2001) に基づいて難易度別に分類されており、学生は教員のアドバイスをもらいながら自分自身で取り組むレベルや内容を選ぶことができる。

さらに、SALC では様々な学習のためのサポートを提供している。本学の SALC を最も特徴づけるサポートに、2名のラーニングアドバイザーによるアドバイジングセッションがある。アドバイジングセッションは学生とアドバイザーの1対1で日本語もしくは英語で行われ、英語学習に関するあらゆる相談に応じている。個々の学生の得意不得意な分野はそれぞれ異なっており、学習スタイルや英語学習に対するモチベーション、または学習進度によっても学習方法が異なってくる。アドバイジングセッションでは、一人ひとりが目標設定や目標に向けての学習の道のりで最適な助言をもらうことにより自身の学習プロセスを管理することができるようになることを目指している。

SALC には、SALCer と呼ばれる学生スタッフがいて、SALC の環境維持や教材の品質管理、利用者のサポートに貢献している。学生であるからこそ、利用者と同じ視点に立ち、利用者が感じる英語学習の難しさを理解してあげられたり、SALC の利用の仕方について利用者が困っている際に声を掛けたりすることができる。さらには、教材を見つける手助けや英語教員との橋渡し役などあらゆる場面においてサポートを行っている。

また、2018年4月から新たに、ラウンジが混み合う時間帯に Peer Assistant（以下、PA）を配置し、学生による学生のサポートを行なっている。スピーキングを上達させたいと思っているながら、英語教員に話しかけることを躊躇してしまっている学生や、授業の空き時間との兼ね合いでラウンジが混み合っている時間にしかラウンジに行けずにゆっくりと教員と話す時間が取れない学生などもある。PA は、そういった学生の会話の相手になったり、SALC Activity の補助をしたりすることを目的に活動している。

そして、SALC では、英語オンリーの環境でも楽しめるイベントや SALC に足を運ぶきっかけとなるようなキャンペーンを開催している。例えば新年度の始まりには、新入学生が SALC に来て英語教員と挨拶を交わしたり自己紹介をしたりして英語に触れることに慣れるように SALC ウェルカムキャンペーンを実施し、以降、利用促進を目的としたポイントカードキャンペーン、英語教員主催のランチタイムイベント、七夕、ハロウィン、そしてクリスマスのイベントと、少なくとも年間6回のイベントを開催している。

このように、快適な学習環境や一人ひとりに最適なサポートを提供することで個々の学習を支え、学生が自律した学習者へと成長すること、つまりオートノミーの育成に貢献することを目指している。

4. 調査方法

4.1 現状把握

まずは SALC の利用状況について現状を把握するため、学生による教材の貸出履歴とイベントの参加状況をデータとして準備した。貸出履歴は実際に学生が SALC カウンターで教材を借りた実数について過去4年半分（2014年4月から2018年7月）を抽出し、イベントの参加状況は2018年度前期に SALC で行ったイベントやキャンペーンの応募券から学年、学科の情報を得た。

教材の貸出件数は、2014年度から2017年度の4年間で平均年4,626件であった。2014年度から2018年度前期までの貸出件数において、全体の貸出件数に対する割合が大きい順にグローバルコミュニケーション学科（84.0%）、初等教育学科（10.9%）、人間栄養学科（2.7%）、心理学科（1.3%）、人間福祉学科（1.1%）となっている。また、どの学科も学年別では1年生の教材利用が最も多く、年次が上がるにつれて減少している。

SALC で開催したイベントやキャンペーンについては、過去数年分の参加者総数のデータは

取ることができるものの、学科別および学年別の詳細なデータについては2018年度分のみが分析可能であったため、現状把握には2018年度前期に開催したイベントおよびキャンペーンの参加者数で分析を行った。今回データとして使用したイベントもしくはキャンペーンの名前や概要、開催時期は以下の通りである。

【分析に用いたイベントやキャンペーンの概要】

● SALC ウェルカムキャンペーン（4月）

SALC ラウンジで英語教員と自己紹介し合ったり会話をしたりすると参加賞がもらえる。

● ポイントカードキャンペーン（5月～6月）

SALC で教材を借りたりラーニングアドバイザーとのアドバイジングセッションを受けたりするとポイントがもらえる。特に、SALC ラウンジで英語教員と会話をするとその時間の長さに応じてより多くのポイントがもらえる。30ポイントを貯めたカードで懸賞に応募することができ、10名に賞品が当たる。

● BECC Birthday Party（6月）

英語教員が主催するランチタイムパーティー。2018年度は BECC 設立10年を祝う記念パーティーであった。

● TANABATA（7月）

七夕の短冊に英語で願いを書いて、SALC 内に設置した筐に短冊を結ぶもの。英語で書いた願いを SALC ラウンジの英語教員に添削してもらう。

上記4つのイベントの参加者数を学科ごとに集計すると、初等教育学科とグローバルコミュニケーション学科の学生の参加が多いことが分かった。また、学年別の集計では1年生の参加が最も多く、続いて2年生、3年生、4年生と、教材の貸出件数と同じく年次が上がるにつれて減少しているという結果となった。

4.2 学生スタッフを交えた議論

2018年7月13日に開催した SALC 学生スタッフのワークショップにて、本研究の趣旨について説明した後、全学生スタッフとともに、上記4.1で得たデータを元に SALC の利用状況について議論した。

まず、教材の貸出データから普段 SALC を利用している学生層とそうでない層を導き出し、それぞれの層に対して、なぜ SALC を利用するのか、または利用しないのかを考えた。同じくイベントやキャンペーンへの参加経験や参加回数、および、参加しない場合の理由を考えた。そこから、議論した内容を元にアンケート項目を作成し、さらに、想定できる改善策を考えた。ワークショップ内で出た議論のいくつかを以下に紹介する。

【SALC の利用頻度とその理由について】

議論1：SALC を利用する学生が初等教育学科やグローバルコミュニケーション学科に多いのは、将来の職業などで英語が必要であるためではないか。ラーニングアドバイザーによるアドバイジングセッションを受けるほか課題に取り組んだり教材を借りたりしている。

議論2：SALC を利用しない学生の多くは、最初は利用していたが途中で利用しなくなってしまったか、将来英語を必要としていないのではないか。また、英語に興味はあっても自信がなくて利用していないのではないか。

【イベントやキャンペーンの参加度について】

議論1：イベントやキャンペーンに参加する学生は、英語に興味があると同時にイベントでのゲームや軽食などの特典に惹かれているのではないか。

議論2：イベントやキャンペーンに参加しない学生は、英語に苦手意識を持っているのではないか。もしくはイベントがあること自体を知らないのではないか。

4.3 アンケート調査

学生スタッフに向けたワークショップやプロジェクトチーム内で話し合った内容をもとにアンケートを作成し実施した。アンケート自体は、印刷されているQRコードを各自のiPadや携帯電話などの端末で読み取り回答するオンライン形式のものであり、2018年9月25日に行われたチューターガイダンスにて全学部生1,130名に案内が配布された。回答は任意且つ無記名とし、当初の回答期間を5日間として、その後、10日間の延長を設けた。研究への協力に同意をした上で回答をしたのは322名であった。

アンケートの項目として、所属学科、学年、SALCを利用する目的や利用頻度、あまり利用しないという回答者には利用しない理由について尋ねた。また、SALCでのイベントやキャンペーンへの参加経験や参加回数、そしてSALCでできることやルールの認知度を調査した。

5. 調 査 結 果

5.1 SALCの利用状況

まず、回答者全員にどのくらいの頻度でSALCを利用するかを尋ね、その頻度によって、SALCを普段から利用する層（以下、レギュラーユーザー層）と自主的にはSALCを利用しない層（以下、非レギュラーユーザー層）の2つに大別した（表1）。毎日SALCを利用すると答えた学生、週に3～4回利用する学生、週に1～2回利用する学生はレギュラーユーザー層、それ以外の学生を非レギュラーユーザー層に分類した。SALC Activityについては、1、2年次の英語の授業の成績評価に関わり、学生は学期ごとに4つの課題に取り組まなくてはならないことから、それらを利用する時にのみSALCを利用すると回答した学生は、自主的にはSALCを利用しない後者のグループに加えた。

表1 Q. SALCの利用頻度を教えてください。

頻 度	人数	分 類
毎日	5	レギュラーユーザー層 (322人中81人、回答者の25.2%)
週に3～4回	18	
週に1～2回	58	
SALC Activityを利用する時のみ	149	非レギュラーユーザー層 (322人中241人、回答者の74.8%)
利用しない、ほとんど利用しない	92	

学年ごと、学科ごとの内訳は図1、図2の通りである。図2の左に示した、初等、福祉、心理、栄養、GCの分類名は、それぞれ初等教育学科、人間福祉学科、心理学科、人間栄養学科、グローバルコミュニケーション学科を指す。

セルフアクセス学習センターの利用状況と利用を促進するための取り組みについて

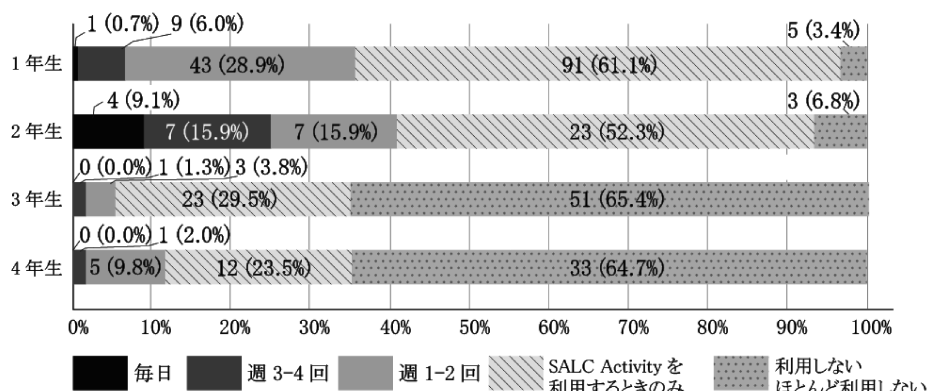


図1 SALC の利用頻度 (学年別)

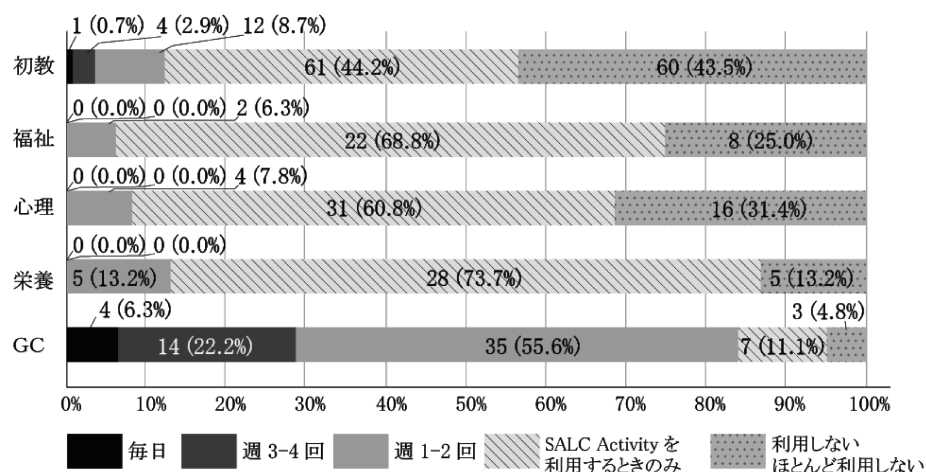


図2 SALC の利用頻度 (学科別)

これによると、SALC を利用する頻度が少ないもしくは利用しない学生は1，2年生よりも3，4年生に多いことが分かる。また、学科別の割合に着目すると、グローバルコミュニケーション学科の学生の利用頻度が最も高く、残りの4学科の学生は全体的に利用頻度が低い傾向にあることが分かる。

また、アンケートでは利用頻度に応じてそれぞれの層にSALCを利用する目的と、利用しない理由について尋ねた。結果をそれぞれ表2，表3に提示する。SALCを利用する目的としては、回答数が多い順に、「課題をするため」、「教材の貸し借りのため」、「BECC Teacher（英語教員）と会話をするため」があげた。上位2つの項目については、授業で課せられた場合も含むであろうことから、必ずしも回答者の全てが自主的にSALCに来ているとは言えない。純粋に自発的にSALCに来る学生も存在するであろうが、何かしらのきっかけがありSALCを学習の場として選ぶ学生も少なからず存在するであろう。その他の目的としては、映画鑑賞や、授業での利用、TOEICや英検など外部試験の受験に向けた学習のためという回答があった。

表2 Q. SALCにはどのような目的で来ていますか？（複数回答可）

回答項目	計（人）	該当者数（ $n=81$ ） に対する割合
課題をするため	66	81.5%
教材の貸し借りのため（iPadやDVDプレイヤーなども含む）	38	46.9%
BECC Teacher と会話をするため	36	44.4%
映画を鑑賞するため	21	25.9%
授業で利用するため	20	24.7%
TOEIC、英検、TOEFLなどの勉強をするため	18	22.2%
昼食を食べるため	13	16.0%
Wii、ジェンガ、スクラブルなどのゲームをするため	13	16.0%
課題を添削してもらうため	13	16.0%
アドバイジングセッション（ラーニングアドバイザーによる個別相談）を利用するため	9	11.1%
SALCer 勤務のため	8	9.9%
その他	3	—

一方、SALCを利用しない理由について、上位から、「英語に自信がない」、「一人では利用しにくい」、「BECC（英語）の授業がなくなった」という回答が目立った。興味深いことに、「将来英語が必要ではない」と答えた学生は僅か5.4%（13人）にとどまり、残りの94.6%は英語を学習することが将来役に立つと考えてはいるものの、英語に対する自信のなさや1人で利用することへのためらいや不安感など、何かしらの原因があってSALCを定期的に利用していないということが分かった。

表3 Q. SALCをあまり利用しない理由を教えてください。（複数回答可）

回答項目	計（人）	該当者数（ $n=241$ ） に対する割合
英語に自信がない	119	49.4%
1人では利用しにくいから	98	40.7%
BECCの授業がなくなったから	89	36.9%
英語オンリーの空間は敷居が高いから	71	29.5%
SALCに来る時間がない	63	26.1%
英語が好きではない	50	20.7%
他に学習する場所がある	29	12.0%
将来英語が必要ではない	13	5.4%
勉強するには集中できる空間ではないから	6	2.5%
その他	5	—

5.2 イベントの参加率

続いてアンケートでは、SALCで行われるイベントやキャンペーンの参加経験について尋ねた。レギュラーユーザー層と非レギュラーユーザー層に分類した回答数に加え、それぞれの分母数に対する割合を表4に示す。

表4 Q. SALCでのイベントやキャンペーンに参加したことがありますか？

	レギュラー ユーザー層	非レギュラー ユーザー層	両グループの 合計
ほぼ毎回参加している	10人 (12.3%)	1人 (0.4%)	11人 (3.4%)
今までに2, 3回, もしくはそれ以上参加したことがある	26人 (32.1%)	20人 (8.3%)	46人 (14.3%)
1回だけ参加したことがあるが, それ以降は参加していない	20人 (24.7%)	47人 (19.5%)	67人 (20.8%)
参加したことがない	25人 (30.9%)	173人 (71.8%)	198人 (61.5%)

回答者322人中198人（全体の61.5%）はSALCのイベントやキャンペーンに一度も参加したことがないと答えた。そのうちの173人（87.4%）はSALCを普段から利用しない層、残りの25人（12.6%）はSALCを普段から利用する層である。レギュラーユーザー層のイベント参加率と非レギュラーユーザー層の参加率を比較すると、SALCに来ることが頻繁にある学生は、イベントにも参加しているという傾向が見られる。

学科別の内訳（図3）を見てみると、グローバルコミュニケーション学科の学生のイベント参加率が他学科の学生に比べて高いことが分かる。

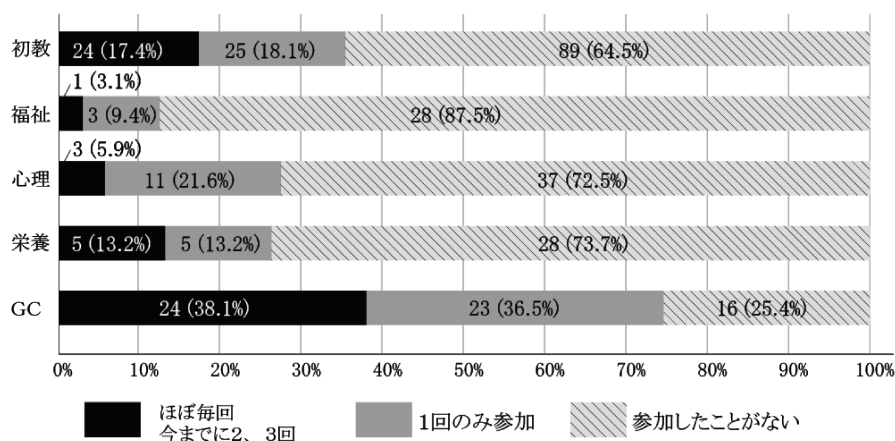


図3 SALCのイベントやキャンペーンの参加状況（学科別）

また、アンケートでは参加経験に加え、イベントに参加した経験がない学生、あるいは参加回数が1回のみの学生に対して、その理由を尋ねた。今まで一度もイベントに参加したことがない理由としては、「英語が苦手だから」（98人、49.5%）、「時間がないから」（86人、43.4%）、

「一人では参加しにくいから」(76人, 38.4%)の3つが上位を占めた。イベントに1回しか参加したことがない理由としては、「参加する時間がなくなったから」(41人, 61.2%),「上手くコミュニケーションがとれなかったから」(16人, 23.9%)という回答が目立った。時間がないという回答を除いては、使用言語が英語のみであることが参加を難しくさせていることが分かった。

5.3 SALC でできることやルール、取り組みやイベントの認知度について

続いてアンケートでは、SALC が行なっている取り組みや、SALC のルール、SALC でできること等についての認知度も調査した。

PA プログラムは、取り組みが始まって間もないことから、その認知度については未知であり、今回のアンケートで調査することにした。表5にある通り、レギュラーユーザー層と比べると、非レギュラーユーザー層における PA の認知度は低い。普段から SALC をよく利用する学生は、SALC 内に掲示された PA の紹介ポスターや、実際に PA が活動する姿を目にする機会が多いので、利用しない層よりも認知度が高いというのが主な理由の一つとして考えられる。これは、SALC 外において幅広い案内が必要であることを示唆している。

表5 Q. Peer Assistant を知っていますか？

	レギュラーユーザー層	非レギュラーユーザー層
はい	44人 (54.3%)	89人 (36.9%)
いいえ	37人 (45.7%)	152人 (63.1%)

また、非レギュラーユーザー層に対して SALC でできることや SALC のルールについて知っているかどうかを尋ねた。この結果によると、非レギュラーユーザー241人中の111人(46.1%)が、ラーニングアドバイザーによる学習相談が日本語で受けられることを知らなかったと回答した。これについては、1年次の SALC オリエンテーションで全学科の学生に対して案内をしているものの、依然として認知度が低いことが分かった。

6. 考 察

アンケート回答者の約4分の1は普段から自主的に SALC を利用すること、それ以外の学生は自主的には SALC を利用していないという結果となった。また、自主的に SALC に来る層であっても、課題をするためや、教材の利用のために SALC を利用することが多いことから、何かしらのきっかけがあって SALC に足を運んでいる学生が多いことが分かる。SALC を自主的に利用しない層については、その約95%が将来の英語の必要性を感じていながらも、英語に対する自信のなさや一人で利用しにくいということが原因で利用に繋がっていないことが分かった。このことから、レギュラーユーザー層に対しては、継続して SALC を利用してもらうための工夫や、より頻繁に利用してもらうための仕組みが、また、非レギュラーユーザー層に対しては、SALC をより身近に感じてもらうための働きかけや、利用の際の不安を払拭する工夫が必要であろうことが言える。

イベントやキャンペーンの参加率については、一度もイベントに参加したことがない学生にいかに参加してもらうように仕向けるか、また、イベントに参加したことが一度しかない学生

に対しては、いかに継続して参加してもらうかについて考える必要がある。不参加の理由は様々にあり、個々の要因に対応するための策や、特定の学生層に対するアプローチが必要となるかもしれない。また、レギュラーユーザー層と非レギュラーユーザー層の参加状況を比較すると、SALCを自主的に利用する学生の方がイベントやキャンペーンに参加していることが分かる。しかし、これら2つの項目に関連性はあったとしても、イベントに参加したからSALCに頻繁に来るようになったのか、SALCに来るからイベントに参加するようになったのかは、このデータからは分からない。また、イベントに参加したことがあるが、SALCに来ることが定着していない学生がいる。非レギュラーユーザー層のうち、2、3回もしくはそれ以上イベントに参加したことがある学生は8.3%、1回参加したことがある学生は19.5%であった。イベントを開催する目的の1つであるSALC利用の促進や広報活動は達成できているかという問いについてはさらなる調査が必要である。

SALCやSALCで行っている取り組みの認知度については、SALCオリエンテーションの際の説明だけでは不十分であることが分かった。また、PAプログラムやラーニングアドバイザーによるアドバイジングセッションは、英語が苦手な学生やよりサポートが必要な学生にこそ知っていてほしい取り組みである。これらの案内や宣伝方法についても、議論や改善の余地があることが分かった。

7. 解 決 策

ここでは、上記のアンケート結果を踏まえて、学生スタッフとの議論の中でSALCの利用を促進するために考案した改善策やアイデアについて述べる。

7.1 SALCの利用促進についてのアイデア

SALCの普段の利用を促進するためには、SALCをよく利用する層と、SALCを自主的に利用しない層のそれぞれに異なる働きかけが必要であると考え。前述したように、レギュラーユーザー層に対しては、いかに継続して利用してもらうか、またはより頻繁に利用してもらうかという点について、また非レギュラーユーザー層に対してはいかにSALCを身近に感じてもらうか、SALCの利用にあたって不安を払拭できるか、足を運んでももらうか、という点が重要となる。

7.1.1 レギュラーユーザー層への働きかけ

SALCで働いている学生スタッフには、SALCのカウンター業務に関する知識や経験に応じて昇級するシステムがある。このシステムを応用して、レギュラーユーザーにも利用頻度や利用内容に応じてランクが上がるシステムを導入してみるのも良い。例えば、「3人の英語教員とラウンジで話す」や、「好きな映画を1本観る」、「教材を30冊借りる」、「イベントに1回参加する」をステージ1のクリア条件として、「7人の英語教員と5分以上話す」や、「映画を3本観る」、「リーダーズ本を使って5千語読破する」、「イベントに2回参加する」をステージ2のクリア条件とするなど、様々な取り組みや学習方法に挑戦してみたいという意欲を掻き立てる仕組みを作ってはどうか。

また、同じ学科の学生からの話は、より身近に感じてもらえるだろうということから、卒業生や先輩から彼女達がSALCをどのように利用し、どのように英語を上達させたかなどを踏まえてそれぞれの成功体験を話してもらえば、ユーザーのさらなる利用を促せるのではないだろう

うか。方法としては、冊子やフライヤー、ポスターなどの紙媒体や、インタビュー動画、プレゼンテーションなどが考えられる。

その他、利用者の満足度を上げるため、フィードバックシステムを導入し、利用者の意見を取り入れることも考えられる。SALC 内に意見箱や、オンラインフォームのリンクや QR コードを設置してみてはどうだろうか。これについては、設置後の定期的な確認とスタッフ間での共有、検討が必要となる。

7.1.2 非レギュラーユーザー層への働きかけ

アンケートでは、SALC を利用しない層の約半数が自分の英語に対する自信のなさを理由にあげていることが分かった。学生スタッフやアドバイジングセッションを受ける学生の話からは、自分より英語の習熟度が高い学生や、知らない学生の前で英語を話すのをためらう学生が少なからず存在することが分かる。こういった学生に対しては、グループもしくは単独で、先生との会話時間を予約できるオンデマンドのフリートークセッションを導入し、他の学生に聞かれることなく安心してスピーキングの練習ができる環境を提供することも考えられる。

SALC の入り口付近には、SALC で使えるフレーズを書いたカードを用意し、「教材を借りる」や、「多目的室、スピーキングブースを予約する」などの場面別に使えるフレーズを紹介している。英語のみの環境に慣れない学生や、英語に自信のない学生が、必要に応じてこれらのカードに頼りながらも英語でコミュニケーションが取れるように配慮したねらいがある。しかしながら、ラウンジで会話をしている際に役立つフレーズの用意はなく、あったとしてもそれを参考にするには一度席を立てて入り口までカードを取りにいかなくてはならない。既存のフレーズカードに加え、ラウンジで教員と話す際に使えるフレーズのリストを新しく作成し、自身のモバイルあるいはタブレット端末に保存できるようにして提供すれば、困った時に役立つフレーズがいつでも確認できるようになるだろう。

アンケートでは、SALC に来ない学生のうちの29.5%が、SALC での使用言語が英語のみであることが原因で SALC に行きづらいと回答している。このような学生に対しては、日本語対応の充実化を検討してはどうだろうか。ドラッグストアや洋服店で多言語に対応しているように、日本語対応できるスタッフをカウンターやフロアに配置し、ネームカードに「日本語で対応できます」のような文言と国旗を入れる。他大学のセルフアクセス学習センターの中には、日本語の使用を可能にしているところもあり、それぞれの大学の学生層に応じて柔軟な対応が必要になることもあろう。しかしながら、これを実行することによっていつでも日本語が可能であるというイメージがついてしまうと日本語の使用を制限できなくなるという事態も予測できる。実行する場合は、細心の注意が必要である。

また、非レギュラーユーザー層の46.1%が、ラーニングアドバイザーに日本語で相談できることを知らないと回答している。ラーニングアドバイザーによるアドバイジングセッションについては、毎年1年生対象の SALC オリエンテーションでの案内に加え、2018度は2年生の英語の授業で全クラスに再度案内をしたが、依然として認知度が低いままである。周知を行う他の方法として、学内向けのパンフレットを作成し、SALC で提供しているサポートとして宣伝をすることも考えられる。

SALC に来ない学生のうちの40.7%が、1人では SALC に行きにくいと回答している。SALC に行きたいという意味があっても同じように考える友人やクラスメイトが周りにいない学生には、積極的に PA の制度を利用してもらいたい。アンケート結果によると、レギュラーユーザー層の PA 認知度は54.3%、非レギュラーユーザー層は36.9%と、現時点での PA 認知度は全体的

に高いとは言えない。より多くの学生に知ってもらうために、授業で宣伝を行ったり、PAの活動時間を既存のラウンジスケジュールに組み込んだりするのはどうだろうか。また、PAに限らず、学生スタッフが困っている利用者に手を差し伸べられるよう、学生対応の方法をワークショップで学ぶ機会を作ることも考えられる。また、利用したい意思はあっても一緒に来てくれる友人がいない学生同士を引き合わせ、バディやグループを作る手伝いをするのも方法の1つである。

7.2 イベント参加率を上げるためのアイデア

一度もイベントに参加したことのない学生の49.5%が、英語が苦手であることを理由に参加していないと答えた。こうした学生に対しては、高校生向けのオープンキャンパスや大学祭でSALC内の日本語使用を可能としているように、学内PRのためのSALCオープンデイを開催し、日本語の使用を可能にしてはどうだろうか。当日は、ゲームやイベントを開催したり、SALCツアーを行ったりする。そうすることで、SALCのスタッフや英語教員、SALCで利用できる教材やサポートなどについて知ってもらうことができ、SALCをより身近に感じてもらえるのではないかな。

一度もイベントに参加したことがないと回答した198人中の76人が一人では参加しにくいことを理由にあげた。こうした学生には、あらかじめ他の学生と引き合せパートナーを作ったり、PA制度を活用したりすることも考えられる。また、友人同士の輪を広げるためのイベントを実施しても良い。例えば、SALCをよく利用する学生や学生スタッフが中心となり、どれだけ多くの学生を呼び込めるかを競ったり、学生番号を使って抽選を行い、当たった学生とその友人を簡単なイベントに招待したりすることで、SALCに来る学生同士の輪が広がることが期待できるのではないかな。

また、特定の学科の学生へのさらなるアプローチ、もしくは学科に特化したイベントやキャンペーンを考案してもよい。日時やテーマを学科の教員と相談の上、その学科の学生が集まりそうなイベントを開催する。学科ごとにグループを作り、週や月単位で競えるイベントを開催しても面白い。

イベントに1回しか参加したことのない学生の23.9%が、その理由を「上手くコミュニケーションがとれなかったから」と答えた。こうした学生に継続して参加してもらうためには、日本語を使用しても良い場所でイベントを開催し、SALCのスタッフや英語教員を身近に感じてもらえれば、次回からの参加も容易になるのではないだろうか。

8. お わ り に

本稿の序盤では、セルフアクセスの役割が、異なる学習者要因に対応するために学習の個別化を可能にすること、また、オートノミーの育成に貢献することであることに触れ、この2つを達成するための第一歩となる利用状況と利用促進の観点から、レギュラーユーザーもしくは非レギュラーユーザーについての情報や意見を収集することで、SALCのさらなる利用促進や、学習環境または学習サポートの改善に活かすことを目的とし、調査を行ったと述べた。SALCに勤務する学生スタッフを交えたプロジェクトチームを発足させ、教材の貸出履歴や、SALCで行ったイベントやキャンペーンの参加者情報からおおよそのレギュラーユーザー層と非レギュラーユーザー層を割り出し、その後2018年7月に行った学生スタッフのワークショップにて、利用度の理由や原因、考えられる可能な解決策について議論した。そして、その議論をもとに

SALC 利用に関するアンケートを作成し、全科学年次の在学学生を対象に調査を行った。

アンケートの回答結果を用い、レギュラーユーザー層と非レギュラーユーザー層それぞれの利用頻度の理由、イベントやキャンペーンの不参加理由、SALCで行っている取り組みや受けられるサポート、ルールなどについての認知度の分析をした。また、その集計結果をもとに、SALCの利用促進を目的としたアイデアや、よりイベントに参加しやすくするための改善策について述べた。

今回プロジェクトチーム内で考案したこれらのアイデアや改善策は、2019年1月に行った学生スタッフのワークショップで共有し、全学生スタッフに実現したい案を投票してもらった。その投票結果を用いて今後実際に改善策のうちのどれかを実行する予定である。学生スタッフの中には、普段からSALCを利用することの多い学生、自身ではあまりSALCを利用しない学生のどちらも存在するが、今回学生の視点から様々な意見が聞けたのは、アンケートの調査項目を作成したり、改善策を考案したりする上でとても貴重であった。関屋・マイナード・クッカー（2010）は、学生がセンター運営に関わることの利点について述べている。2019年度についても、改善策を実行するプロジェクトチームを発足させ、学生スタッフと共にセンターの向上に努めたい。また、そうしてプロジェクトに携わり、問題を発見し、議論を重ね解決策を見出し、率先して実行に移していくことを通して、学生スタッフの問題解決能力やリーダーシップが育成されることも期待している。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。今回の調査では、学科や学年ごとにアンケートの回答率に偏りがあったため、詳細な分析をすることができなかった。また、アンケートには自由記述を設けたものの、選択肢による回答が多く、SALCのレギュラーユーザー及び非レギュラーユーザーの行動心理を事細かに把握できたとは到底言えない。今後同様の調査を行う際は、回答率を上げるための工夫や学生へのインタビューなどの質的調査も必要であろう。また、前述した通り、SALCでのイベントやキャンペーンを開催する主な目的として、よりSALCを身近に感じてもらい、利用に繋げるという広報活動がある。しかしながら、今回のアンケート結果ではこれらのイベントやキャンペーンが実際に広報活動としてその目的を果たしているかについては調査できなかった。実際に普段から自発的にSALCを利用する層へのさらなる調査がこの問いに対する答えの手掛かりとなり、ひいてはレギュラーユーザーの増加に繋がるのではないだろうか。さらに、今回の研究目的は、センターの利用状況の把握と利用促進であったが、その延長線上にある実際にSALCを利用した場合の学習成果については研究の範疇外であった。先行研究にある通り、SALCが、オートノミーの育成という本来の目的を持って機能しているかどうかについてはさらなる調査が必要である。SALCを利用した学生の「学び」の内容や学力の推移を調査することなどから教育効果を検証し、常に改善の手を加えていくことで、SALCで行う教育の質保証に一助できるかもしれない。今後の課題としたい。

＊ 本研究は、広島文教女子大学において平成30年度教育・研究活動支援プログラム高等教育研究・実践GP助成を受けたものである。

謝 辞

本研究において、SALCの学生スタッフには、センター運営についての意見や学生ならではのアイデアを共有してもらった。特に、プロジェクトメンバーとして研究に携わった学生たちは、様々な場面で活躍をしてくれた。ここに感謝の意を表する。

引用・参考文献

- Benson, P. (2001). *Teaching and researching: Autonomy*. Harlow: Pearson Education.
- Benson, P. & Voller, P. (1997). Introduction: Autonomy and independence in language learning. In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning* (pp. 1–12). New York, NY: Routledge.
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gardner, D. & Miller, L. (1999). *Establishing self-access: From theory to practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gardner, D. & Miller, L. (2014). *Managing self-access language learning*. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
- Littlewood, W. (1997). Self-access: Why do we want it and what can it do? In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning* (pp. 79–91). New York, NY: Routledge.
- 関屋康・ジョー マイナード・ルーシー クッカー (2010) 「学習者の自律を支援するセルフアクセス学習」
小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者－学習者要因と自律学習』 (pp. 193–212)
大修館書店
- Sheerin, S. (1997). An exploration of the relationship between self-access and independent learning. In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning* (pp. 54–65). New York, NY: Routledge.
- Sturtridge, G. (1997). Teaching and language learning in self-access centres: Changing roles? In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning* (pp. 66–78). New York, NY: Routledge.
- 竹内理 (2010) 「学習者の研究からわかること－個別から統合へ－」 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者－学習者要因と自律学習』 (pp. 3–20) 大修館書店

参考 URL

The Japan Association for Self-Access Learning (日本自律学習学会). <https://jasalorg.com> (最終閲覧日: 2019年1月24日)

—平成31年1月25日 受理—